

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.1 January 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

1

CONTENTS

- 巻頭言
「世界は鏡」—オバマ大統領・鳩山首相演説に見る共時性を読む—
／井上昭夫 1
- 天理教教理史断章 (49)
梅村文書②
／安井幹夫 2
- 天理教海外伝道の資料 (1)
上海伝道関連史料①
／深川治道 4
- 「二つ一つ」の環境学 (28)
今、日本の森林が危ない!
／佐藤孝則 6
- 今日の時代における宗教批判の克服学 (13)
宗教者と信仰者についての一考察
／金子 昭 7
- ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (10)
ハワイ人の主権回復運動④
／井上昭洋 8
- 宗教・国際協力・NGO (18)
SVA の歩み⑤
／野口 茂 9
- 第8回天理スポーツ・ギャラリー展報告 (11)
ソフトボール
／難波真理 10
- 図書紹介 (49)
『現代アメリカ宗教地図』
／島田勝巳 12
- English Summary 13
- おやさと研究所ニュース 14
平成21年度公開教学講座第8講／「日本爬虫両棲類学会 第48回大会」が天理大学で開催／日本生命倫理学会第21回年次大会／大阪希望館支援集会

巻頭言 「世界は鏡」

—オバマ大統領・鳩山首相演説に見る共時性を読む—

おやさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

手踊りの「みかぐらうた」六下り目の三ツに「みなせかいのむねのうち かゞみのごとくにうつなり」と唄われる重要な一節がある。既成の理解では世界の「人間の心使い」は、神の胸の内に、鏡に映るよう見抜き見透しに映るという意味に限定されていた。はたしてこの解釈は正鵠を射ているのであろうか。「世界の胸の内」が「鏡」それ自身であるという解釈は出来ないであろうか。たとえば、次の「みかぐらうた」の「鏡」に対応する手踊りの表現が、それぞれ人間の胸の内を指しているの、「鏡」のごとくに映るのは「神の胸の内」だけでは無いということが、手振りの動作からは読み取れる。八下り目十ド「このたびいちれつに すみきりましたがむねのうち」の中の、澄み切り「ましたが」と、四下り目十ド「このたびむねのうち すみきりましたがありがたい」の中の、胸“のうち”の手振りなどに見られるように。両方とも両平手で、ひたい前より胸前に「上下に円を描く」という「鏡」に相似する形を表現した後、直ちに指先を同時に胸に取るからである。

一方「世界は鏡」であるという「おさしづ」における教えは、「みかぐらうた」と「おふでさき」に現れた「鏡」の意味を統合している。たとえば、その統合性は「おふでさき」の「にちへに神のむねにわたんへとほこりいゝばいつもあれども」(XIII-21) という一首の～神の胸と人間の胸とは呼応関係にあるとする～両面鏡の解釈、「みかぐらうた」六下り目第三歌の「世界の胸の内が鏡」であるとする思想的解釈、そして勸善懲悪を想起させる「人間の心使いが神の胸の内にみな映る」とする道徳的解釈の三側面を含んでいると見られる。

「おさしづ」においても、ぢばも鏡なら、世上も鏡であり、人は鏡、世界が鏡とも教えられる。われわれ人間一人ひとりとは、それぞれの胸の内に警えられる、澄まされ磨かれるべき「鏡」をもって生み落とされた存在である。「世界は鏡」であるということはこの意味でもあり、「鏡」は世界全体を映す限りに

おいて、神の身体それ自身でもある。したがって、その「鏡」は過去、現在、未来をも映すのである。このような次第で現代の「鏡」に、今これを書いている2009年という時間軸に絞って、「鏡」である神の胸の内に映し出されているメッセージを察知し、所見を述べて新年の巻頭言に代えておきたい。

2009年正月は、「おふでさき」御執筆の明治2年正月より数えて140年目に当たる年であった。その正月20日、つまり、教祖年祭の直前に、米国オバマ大統領が初の黒人大統領として就任演説を行った。現代世界の財政危機は高山の強欲と傲慢によってもたらされたと喝破した後、「道」の比喩を説得力あることばで援用し、過去の「埃」を「払って」(dusting off)、新たな覚悟で変革(change)にむけて、米国建国の「元一日」(the year of the America's birth)の精神に戻り、差別を排して一体となり、あらたな「責任の時代」に進進しようと訴えた。つづくプラハにおける歴史的な核廃絶演説によって、大統領にはノーベル平和賞が授与された。

一方、10月26日の立教の元一日には、民主党の鳩山由紀夫首相が初の所信表明演説を行った。「友愛精神」を基盤として、農山漁村や地域社会の活性化を目指し、戦後行政の「大掃除」の断行と、世界の貧困緩和と国民生活を第一とした政治を行うという決意を表明した。前者は18分、後者は80分の演説であったが、両者ともその肉声には迫力があつた。両演説者のキーワードの前提は「大掃除」ということばにあつた。

立教と教祖年祭の「元一日」が合図立て合つて、日米という世界の「高山」から発せられた演説内容には、教理用語と共鳴するキーワードがほかにもちりばめられていた。それらは決して単なる偶然の一致とは思われない。われわれの「胸の内」にも、新たなる「チェンジ」への決意と矜持が映つていなければ、それぞれの心の「扉」は、年が明けても閉ざされたままで、前景は視野に入らず、「鏡」は曇っていると批判されても致し方がない。